

て貢獻せし事みえたり、

〔宇和郡舊記〕亨沖之島出入之事

一正保二年に國により繪圖上り申時、鈴木治大夫萩原仁左衛門、此島江渡り、境目被改候節、土佐領廣瀬庄屋與惣左衛門、新右衛門云者出逢申故、斷申達、宇和領分之繪圖整申候、然所に正保三年秋、廣瀬庄屋助之允と云者、廣瀬之境目郡合川をこし、此方かし地の内大川を境、姫島はきれと境と云、其後は、姫島山の内に又境をたて、理不盡成儀申かくるより、雙方口論初るなり、略下

〔南海通紀〕六豫州能島來由記

伊豫ノ國ノ海表ニ能島、來島、院島トテ三ツノ大島アリ、其ノ外小島十二餘レリ、豫州河野氏ノ部類ニシテ、周防山口ノ府ニ隣スル故、大内家ニ交接ス、略下

〔小早川什書〕二安藝國沼田庄、同國乃美郷、伊與國大島四分之一、略中等、施行遵行奉書等也、

小早川美作守持平知行分、伊豫國越智郡内大島四分壹地頭職事、早任去月廿七日御下文之旨、可被沙汰付下地於小早川又太郎熙平代之由所被仰下也、仍執達如件、

永享十二年七月六日

右京大夫判

河野九郎殿

〔易林本節用集〕下伊豫州上、管十四郡、四方二日、原野田畑多、桑麻鹽草豐也、大中國也、

〔伊豫古蹟志外傳〕上土壤考

伊豫之爲國也、多原野圃田、自嘉穀桑麻鹽草藥物銅坑釣漁、以主百貨財、皆產於此地、宇和喜多山海諸産亦多矣、因稱謂大中國、或謂上國三十五國之一也、

〔日本地誌提要〕六十三伊豫形勢 石鎚ノ山脈、東南ニ連亘シテ土佐ヲ界截シ、支脈西北ニ走リテ、州

中ヲ横貫ス、北方島嶼錯列シテ、山陽ニ接シ、西方灣嘴參差、西海道ニ對ス、道後四郡、田野大ニ闊

地勢  
地味